



冒険の始まり

これは昔々の物語。

お城には王様や騎士が居て、
剣と魔法が活躍する時代。

あなたも一緒に冒険に出ませんか。

ただし、初めての冒険者は「はじまり」を読むのがお約束。
読まずにとんでもない旅に連れて行かれたとしても知りませんよ？

賢い冒険者は、先輩の言うことに耳を貸すものです。

さて、準備はできましたか？

では早速冒険の旅に出掛けましょう！

はじまり

ようこそ。

そして始めまして。

ここは天堂の描くファンタジーの世界です。

上に「似非」がつく、ね（笑）。

これから物語を読んでやろう！という奇特な方。

まず最初に以下の点にご注意くださいませ。

そしてこれらを許容できる方のみ、物語にお進みくださいね。

素っ飛ばして読んで、後から苦情を申し立てられても受け付けませんよ！（笑）

小心者なので、苛めないようにしてください～。

よろしく願いいたします。

■お約束■

□これは男×男のいちゃらぶ（？）です。

とはいえ、際どいシーンは一切ありません。せいぜいちゅー止まりなのはここで宣言いたします。

□王妃様&王女様は、男です。特に必要性はありませんが、男なんです。

そのあたり、ご容赦ください。

□これは1995.8に発行した同人誌「Princess Quest」の焼き直しです。原則的にあまり元原稿弄っていません...（汗）。巧拙はともかく、当時の勢いを再現したかったので。

□同人誌発行時は某パロディとして書いた作品でしたが、今回は『完全オリジナル』として焼直しました。

「元はどんなパロディだったか？」は、第四章最後に掲載してあります。興味のある方は合わせてどうぞv

□とにかく『似非ファンタジー』『ファンタジーもどき』ということ念

頭に置いてお読みくださいませー（汗）。

以上のことがご了解いただける心の広い方のみ、左メニュー「第一章」からお進みくださいませ。

なお、このお話は2003.6.9完結いたしました。

お待たせした方（居るとは思えませんが）、すみマセンでした！

昔々あるところに、一つの小さな王国がありました。

王様の名前はヤタク、王妃様の名前をマヒロといいます。

お二人は犬も食わないほど仲が良く、微笑ましいほど些細な痴話喧嘩を時折交えては、それはそれは幸せに暮らしておいででした。

さて、お二人にはそろそろ年頃になる王女が一人いらっしゃいます。

聡明で美しく、両親—特に王様は養女を大変溺愛しておいででした。

名前をロウナ姫。線が細く儂げな印象を持つこのお姫様には、色々な国からそれはもう沢山の求愛の手紙が届いていますが、王様は片っ端からそれらを破り捨てていました。「姫にはまだ早い」というのが表向きの理由でしたが、王妃様によれば「いくつになっても、姫に変な虫がつくのが嫌なだけ」のご様子です。

悲鳴からそれは始まりました。

まず王女の不在を知った侍女が悲鳴を上げ、その報告を知った王様が悲鳴を上げたのです。

『しばらくロウナを預かります』

綺麗とは言い難い字で、王女が散歩をしていた森の一本にそう伝言が残してありました。

王様は半狂乱になって、王女の行方を探し、連れ戻すようにとのお触れを国中に出しました。

お触れを見て集まった中には、姫に求婚している他の国の王子様たちも沢山居ました。みんな、これで王女を無事に助け出したら、いくらあの王様でも結婚を反対しないだろうと思っていたのです。

総々たる顔ぶれを見ながら、王女様付きの近衛兵だったツユキは「負けられない...！」と闘志を燃やしていました。彼は身分違いだと知っていながらも、王女様に想いを寄せていたのです。そしてなによりも、王女様を守る立場の近衛兵だったにも関わらず、一人の散歩を許したため、今回の事態を招いてしまったという責任感もありました。

王様は王妃様と一緒に立ったバルコニーから、「森に残っていた文字を調べた結果、あれは魔法で書かれたものとわかった。城の魔法使いたちが言うには、この国の西に住む魔法使いたちが使う呪文らしい。どうか姫を無事に連れて帰って欲しい」と勇者たちに訴えました。ツユキは静かに王様と王妃様に一礼をすると、自分も他の勇者たちのあとを追います。

見慣れた長身の家臣を見送ると、王様は椅子にどっかりと背中を預けました。

「そんなに心配しなくても、ロウナなら大丈夫だって」

身体も細く、今にも折れそうな華奢な外見をしていながら、悪運は強く性格のほうも中々強かな

ところがあることを知っている王妃は、気落ちしがちな王様を明るく励ますのでした。

王様はぎこちなく頷いて、王妃様の頬にそっと接吻をなさいました。こんなときでなければ引っぱたいてやるのに...と王妃様が思ったかどうかは定かではありません。

王様は「西の地方の魔法使い」と言われましたが、この地方に魔法を生業にしているものは多く、ツユキを始めてとして、勇者たちは中々ロウナ姫の足取りを掴めませんでした。

ツユキは他の勇者とは身分も国も違うので、彼らとは別の行動をとっていました。それでも時折水を汲みに行くと、泉などで顔を合わせることもあります。高貴な方とは口をきく機会などありませんが、人懐っこいツユキは従者の何人かとは仲良くなって、たまには雑談なども交わします。ただ、ロウナ姫の情報だけは、お互い秘密ですから教えません。

ある日、そんな風に馴染みになった数人と話していると、近くで喧嘩のような騒ぎが聞こえてきます。不審に思って近づくと、村のものと思しき少年と、勇者の一人が争っている姿が見受けられました。味方は誰一人としておらず、少年は圧倒的に不利で、その内に誰かに殴られ始めました。

義を見てせざるは勇なきなり。

義理と人情にかけては近衛兵の中でも1、2を争うツユキです。立場もなにも関係なく、少年の傍らに駆けていきました。

剣の鞘と鞘が打ち合う音が響いて、野次馬は少年に助っ人が出来たことを知ります。

少年と言い争っていた勇者は酷く面白くなさそうに、ツユキを見下ろしました。

整った顔に、黒い瞳と健康的に焼けた肌。見覚えがある...と記憶の糸を辿ると、答えは簡単に浮かんできます。

「誰かと思えば、ロウナ姫の国の馬の骨か」

姫と結婚したらすぐに首を斬ってやると言い残し、彼は集まった従者を引き連れて、野次馬の見守る中を去って行きました。

いくら腕に覚えがあると言え、多勢に無勢。一度に襲い掛かれては、流石のツユキでも勝つ自信はありませんでした。口の割には引き際の良い相手で心底助かった...と後先考えず飛び込んだ、ちょっと間抜けな英雄様です。

しかし、去っていった勇者の最後の台詞だけはいただけません。

「もし助けたのがあの人だとしても、結婚するかどうかを決めるのはナっちゃんなんだからね」

幼馴染の特権で、ツユキは本人から愛称で呼ぶことを許されている一人だったりします。

手や服に着いた砂を払っていた少年は、ツユキが漏らした独り言に手を止めました。

「ナっちゃん...？」

「ああ、ロウナ姫のことだよ」

「ってことは、あんたもロウナ姫を助けに来た勇者なの？」

「勇者ではないけど、助けに来たのは本当だよ」

自分よりも幾つかは若いだろうに、さして視線の変わらない少年にツユキは無邪気に笑います。

これでも一応は貴族の子息なのですが、権謀術数が渦巻く世界ではその純粹さは通用しないだろうと、彼の父親は彼に剣の道を勧めました。そしてそれは確かにツユキの性に合っていたようです。現在は家督のことは全て兄に任せ、自由気ままに王城勤めをしているツユキなのです。

剣を鞘ごと腰に戻しながら、ツユキはしげしげと少年を見ます。

人懐こくて愛嬌のある顔立ちからは、とても王族や貴族に刃向かっていく姿が想像できなかったからです。

理由を聞いてみようかなとツユキが思案している間に、先に少年のほうが覚悟を決めたようです。

先ほど失敗して痛い目に遭っているの、なんとなく彼にしては慎重な言葉運びになりました。

「その...、ロウナ姫の居場所とかってアテはあるの？」

敬語を使うべきだったかなと、言った後に後悔しますが、さきほどの勇者と違ってこの目の前の青年はあまり形式にはこだわらないらしく、気にもとめていない様子でした。これなら今度はうまくいくかもしれない、と少年は自分に発破を駆けます。

「ないよ。西の魔法使いが連れ去ったと言われているだけで」

「じゃあ、俺がその西の魔法使いに心当たりがあるって言ったら、俺も旅に同行させてくれる?!」

ツユキは手頃な宿屋に、少年一後から『リシン』と名乗りましたーを連れて飛び込みました。泉にはまだ人が沢山居ました。ツユキは会話の内容を、あまり聞かれたくなかったのです。特に他の勇者たちには。

泉のところで騒ぎになったのも、元はこの話をあの勇者のところに持っていったからなのだとしてリシンはツユキに経緯を語り始めました。

最初は穏やかに話を聞いていた相手も、リシンが「同行させてくれ」と願うと、「馬の骨は連れて歩けない」とすげなく断ってきました。リシンは「同行させてくれなければ教えない」と一点張りをしたため、最終的に刃を振り下ろされ、ツユキに助けられたというわけです。

「どうして『西の魔法使い』の居場所がわかったの？」

「居場所がわかったわけじゃないの。居るところなんて昔っから変わってないよ。ただ、お触れで書いてあった特長が僕の知っている人に似ているだけ」

今回は目撃者が居なかったため、魔法の残り香から相手を探る高度な魔法が試みられました。ただし、対象の魔法一樹木の表面に魔法文字を描くというのは魔法心得のある者なら誰にでも仕える簡易な魔法です。高度な魔法になると魔法使いによって様々な癖が出ます。ですが今回のような簡単な術の場合、魔法の編み方に特徴が出ることは殆どありません。よって、逆探知の魔法で得られた情報はほんの僅かのものでした。

【西方】 【森】 【訓練をつんだ魔法使い】 【少年】 【強い力】 【右肩上がりの文字】 【神経質で繊細な性分】

断片ばかりの情報は、謎かけも同然です。

実際、ツユキたちには、その特徴とやらは一切役に立ってきませんでした。ツユキたちの国は広く、西方と言っても、漠然としすぎていたからです。また、西方は魔法の盛んな地方で、数多くの魔法使いが存在するのです。その中から条件に見合う魔法使いを探し出すのは至難の業でした。そこで、王様は魔法使いギルドに条件に合う者を探させました。ギルドも面子が賭かっています。犯人を割り出そうと躍起になりました。

しかし、ギルドが指名していた魔法使いはどれもハズレでした。ツユキたち勇者が手分けして会いに行ったのですから間違いありません。

それでも個人が特定できるというのなら、彼は余程決定的な情報を持っているのでしょう。

「リシンの親しい人？」

「うん。僕はね、この村じゃなくてもっと西の村で育ったんだよ。

けど、お父さんが仕事の都合でこの街に越してきちゃったから…。サヨシ君とは、その時の幼馴染なの」

初めこそ『俺』といきがっていた少年も、やがて興奮が覚めてくると、本来の心優しい姿を取り戻しました。彼は本当は喧嘩さえも嫌いなのだそうです。

「サヨシってというのが、その魔法使い？」

「そう。サヨシ君は本当は優しい人なんだよ。そんな、お城から王女様を誘拐するような人じゃないんだ。説得しに行きたいけど、遠すぎて僕一人じゃあの村まで行けなくて…」

「それで『同行させてくれ』って言ったんだ？」

こくりと小さく頷く姿は大きな身体に似合わず可愛いと、弟の居ないツユキはすっかりリシンを気に入ってしまいました。

「よし！　じゃあ、リシンはそのサヨシの説得、俺はナツちゃんの救出。利害の合ったところで、一緒に西の村まで行こう！」

「ほ、ホントに…？」

「騎士に二言はないよ」

ツユキはからりと笑いました。

心の暖くなる笑顔を持っている人だなあと、リシンもすっかりツユキのことを気に入ってしまったのでした。

一度他の勇者に話を聞かれているため、尾行を巻こうと二人はは目的地から少し遠回りをして旅をしました。

ツユキは一人旅で必死に口ウナ姫の行方を追っていたときよりも、今のほうが何倍も楽しくて仕方ありませんでした。

リシンともすっかり打ち解け、この旅が終わっても、友人として付き合い合えたらいいなと思うほどになったのです。

馬の背に揺られながら、リシンはどうして幼馴染が犯人だと思ったのかをぽつぽつと話してく

れました。

「魔法使いギルドで探しても、条件に合う魔法使いって見つからなかったんでしょ？」

「ああ」

「だからね、その魔法使いはギルドに入っていない魔法使いなんじゃないかなって思ったの」
そこまではツユキたちも推察しています。ただ、考え付いたところで有効な手掛かりとはなりませんでしたが。ギルドに入っていない魔法使いというのは、そもそももぐりなのです。犯人であるか否かは別として、彼らを探し出すだけでも一苦労なのでした。

王都から遠くなるに連れ、街道の緑は深くなっていきます。風もなく、騎馬で進むには丁度良い天気でした。ツユキは手綱を握りながら、「ナツちゃんとお弁当持って遠出したかったな...」と心の中だけでそっと呟きました。

「実はね。サヨシ君のお父さんは、魔法使いギルドに加盟していない魔法使いなんだ。

ギルドに入っちゃうと、バカ高い手数料を取られて好きな仕事が出来ないからって、ずっと前に言った。

でもね、お父さん、すごく優しい人なんだよ。ギルドを経由して仕事を頼まれると手数料分高くなっちゃうからって、直接仕事を引き受けてくれてたんだ。なるべく村のみんなの負担にならないように、って。だから村の人は凄く助かってたんだって」

「よくそんなこと覚えてたな〜」

聞いた話では、リシンが村を出たのは10歳をいくつか越えた頃です。幼馴染のことならばいざ知らず、父親のことまで覚えているというのは不思議でした。

そう指摘すると、少年は照れくさそうに笑いました。

「これはね、僕のお父さんに教えてもらったの。僕のお父さんとサヨシ君のお父さん、仲が良かったんだよ」

「そっか」

ひとつ条件が合致すると、他の条件もなぜだか符合してくるような気がしてきます。

サヨシは【西方】に住み、両親から【訓練を受けた魔法使い】であり、確かに【右肩上がりの文字】を書く、【神経質で繊細】な【少年】だったからです。【森】という欠片だけはリシンもわからなかったようですが、住んでいた家は森に近かったので、そのせいではないかということに落ち着きました。

道中、リシンは『西の魔法使い』こと、サヨシのこともよく語ってくれました。

サヨシという少年は、時々おっちょこちょいなこともしますが、基本的には、温和で心根の優しい人物のようです。

リシンはいかに自分が幼馴染の少年のことを好きなのか、馬上で散々のろけてくれました。落ち込み気味だったリシンも、サヨシとの思い出を口にするときだけは幸せそうです。

しかし、聞けば聞くほど、ツユキは彼がロウナを攫ったとは考えにくくなりました。

一本当に犯人は『サヨシ』なのかなあ？

他の勇者の尾行がなくなってしまうと、今度は段々不安になってきます。

もしリシンの思い違いで、サヨシはナツちゃんに全然関係ないのだとしたら...

ツユキはぶるっと身震いしました。

しかし、今更「や一めた」とは言いにくい状態です。それに、確かに符号は合致するのです。とにかく後二日。

頑張っリシンの言う、西の村まで行ってみるしかありません。

今はただ、他の勇者がロウナ姫を見つけていないこと、そしてなによりもロウナ姫が無事であることを祈るばかりです。

早く、あのはにかんだような照れたような笑顔が見たいなと思いつつ、星空の下でツユキは瞼を閉じました。

歩けばリシンの居た村からは十日以上かかる道程も、馬では四日の短い旅になります。

ツユキはリシンにも馬を買ってくれようとしていましたが、農村育ちの少年は一人では騎馬も出来ません。仕方なく、二人は一頭の馬で旅をしました。

リシンが幼い頃に住んでいた村は、西の国境に程近い、小さな集落でした。

「なつかしいなあ」

拙い記憶を頼りに、整備されていない道を辿りながらリシンはしみじみと呟きました。この村を出てそろそろ五年が経とうとしています。少年の年齢にとって、五年は決して短い時間ではありません。大人たちが思うよりも、ずっとずっと長い時間なのです。なんせ人生のほぼ三分の一に値するのですから。

「全然変わってないよ。懐かしいな」

「それはわかったから。」

「サヨシの家は？」

逢えない時間が募るほど、ツユキの不安は高まっています。とてもリシンの相手をしている余裕などありません。リシンもツユキの目的が自分とは違うことを思い出したのでしょう。手綱を取る広い背中にしがみつきながら、記憶に残っている自分の家と、そして隣に建つサヨシの家へと道案内を始めました。

果たして。

やっと辿り着いた二つの建物は、すっかり荒れ果てていて、とても人が住んでいるようには見えませんでした。

「なんでっ?!」

リシンの家は、家族ごと引っ越してしまったためだろうということは容易く想像がつきます。

けれど、隣にはサヨシの一家が住んでいたはずなのです。

「なんでっ? どうしてっ? どうしてサヨシ君いないんだよっ?!」

大きな身体を一杯に使って騒ぐリシンを置いて、ツユキは馬を下りると、家の方に近寄って行きました。中に何か手がかりがあるかもしれないと思ったのです。

しかし、扉に触れようとしたその時、鋭い声が飛んできました。

「その家に何しに来たんだねっ?!」

弾かれたように、二人は声の主を探しました。

相手はすぐに見つかりました。

ツユキたちにとっては、母親よりも多少年嵩の女性が、鬼のような形相で辻に立っていたのです。大きな丸籠を抱えているところを見ると、井戸へ洗濯でもしに行くところだったのでしょう。

驚きで言葉の出ない少年たちに向かって、彼女は更に続けます。

「その家はもう何年も使っていないんだ。あんたたち、なにをしに来たか知らないけど、扉は開かないし、中に入ったってなんにもないよ！」

二人のことを空き巣かなにかと勘違いしている様子の女性に、リシンは訴えかけるように走り寄って行きました。

「僕、五年前までこっちの家に住んでいたんだよ！」

ねえ、小母さん。こっちに住んでいた人たち、どうしちゃったの？

家を使ってないって、どうして？！

引っ越しちゃったの？！

矢継ぎ早に喋る、身体のかなりの少年の『ここに住んでいた』という一言に、中年の女性は眉を顰めました。胡乱そうにじっと彼の顔見つめます。記憶の欠片を彼の顔に探しているのでしょう。しばらく見つめ続け、ようやく何か思い当たるものを見つけたようです。

「まさか、絵描き屋の...？」

「そう！ その息子のリシンだよっ！！」

父親の職業が出たため、少年は破顔しました。

彼女の方も、もう一度上から下まで少年を見回し、旧知の人物の面影を認めたのでしょうか。先程までの険しい表情を一転させ、美人ではありませんが、人当たりの良さそうな笑顔を見せました。その笑顔に、ツユキは強張らせていた肩の力をそっと抜き、リシンの横に静かに立ちました。

「そっちは？」

しかし、見慣れない顔と、村の者とは明らかに異なる雰囲気を感じ取ったのでしょうか。おかみさんの表情に、再び警戒心が浮かびました。

尋ねられて、ツユキは一度リシンを見てから、慎重に選ぶ言葉を考えました。

「旅先で友達になった、ツユキと言います」

嘘はついていませんが、本当のことを全部話してもいません。いつもは正直なツユキですが、彼女の態度になんとか全てを明かすことが躊躇われたのです。先程の態度から考えると、サヨシの一家になにかあったのは確実でしょう。しかも、そのことに触れられるのをとても恐れています。ひょっとしたら、ツユキがお城の騎士だと告げたら、更に警戒されてしまうかもしれません。それほどに頑なな態度だったのです。

爽やかな笑顔が似合う青年を不審そうに見上げながら、彼女はリシンにも視線で尋ねます。

「本当だよ。サヨシ君に会うために旅をしてきたんだけど、一人じゃここまで来れなくて。それでツユキ君についてきて貰ったんだよ」

「一人じゃ来られないような旅をしてまで、なんでサヨシに逢おうと思ったんだい？」

知らず、口調が険しいものに戻り始めていました。

「逢いたかったからだよ！」

他に理由はないとばかりに強い口調でリシンは告げました。

「逢いたかったからだよ！」

本当はもっと前に来たかったんだけど、全然機会がなかったんだ。約束してたのに…」

「約束？」

その話はツユキも初耳です。自分よりも僅かに背の高いリシンの傍で首を傾げると、少年は大きく頷きました。

「引っ越しても友達だから、絶対絶対逢いに来るって約束してたの。サヨシ君が寂しくなる前に、絶対僕が逢いに来るって約束したんだよ。サヨシ君は無理だよって言ったけど、でも僕ちゃんと来たのに、どうしてサヨシ君居ないんだよっ」

最後の言葉は誰に向けたものでもなく、そして誰にでも向けた言葉のようでした。

答える言葉を持っているのはツユキではありません。

丸籠を抱えなおし、息子ほどの年の少年が今にも泣き出しそうな顔をするのを下から眺めやりながら、小さく溜息を落としました。

「思い出したよ。トリーの家の上の坊主。そういえばあんたはなにををするんでも、ギーヤの上の坊主にくっついて回ってたね。人付き合いのあんまり上手い子じゃないけど、あんたと居るときだけは楽しそうな顔してたっけねえ。あんまりにも今のあんたが大きくなりすぎてて、すっかり忘れてたよ」

「小母さん、僕たちのこと知ってるの？」

「知ってるともさ。小さな村だからね。あんたは覚えてないかもしれないけど、あたしゃ村長の娘だよ。ギーヤの坊主の母親とは仲が良くってね。よくこの家にも来てたもんだ」

「えっ」

顔に覚えがなかったのでしょうか。真っ正直に態度に出る少年に、「仕方ないさ」と恰幅の良い女性も笑いました。

「亭主と死に別れるまでは、他の村に居たからね。あんたが顔を覚えてなくても無理はないよ。あたしが戻ってきた頃には、一家揃って越しちまった後だったからね」

説明されてやっと辻褄が合ったのでしょうか。酷く満足そうなリシンでしたが、ツユキはその脇を肘でつつきました。本当に聞きたいのは彼女のことではないからです。

「リシンっ」

耳打ちされて、リシンも言いくるめられている場合ではないと思い出したようです。

「それで小母さん、サヨシ君たちどうしちゃったの？ 知ってるんでしょ？」

「それは…」

言いかけて、彼女は再び口を噤みました。

「リシン、彼は本当に信用できる男かい？」

ツユキに隠れるようにして、リシンに問いかけます。呆れたようにリシンはまだ疑うの？という表情をしましたが、彼女は引きません。

「信用できます。

大体、僕がサヨシ君に悪さするような人を連れてくるわけじゃない」
あくまでも幼馴染を基準とするリシンですが、それだけにその言葉には真実味が感じられました
。

ようやく納得したのでしょうか。

「わかった。話してあげるよ。ただし、立ち話じゃなんだ。あたしの家へおいで」
二人が否やを唱えるはずもありません。

それぞれ胸に去来するものを抱えながら、名残惜しげに、寂れたふたつの家を後にしたので
した。

村長の家の離れが、彼女の家でした。三人いた息子は全員独り立ちしたため、今は一人で暮らしているのだそうです。

そこで語られたのは、少年と少年の面影を残す青年にとっては衝撃的な事実でした。

話は四年前に遡ります。

リシンという友人が傍にいなくなったことで、サヨシはまた一人でいることが好きな少年に戻っていました。外に出なくてもいいと言う理由からか、魔法使いである両親に進んで師事もしました。素質もよく、その腕は師匠二人でさえ瞳目するものがあつたそうです。未は王城に仕える大魔法使いになるかもしれないと、お酒の席で彼の父親は何度も触れ回ったりしていました。

サヨシは修業に暇ができると、村の外れにある森に、よく出かけました。この森は深く、村の猟師でも入り口近くまでしか入っていきません。それだけでも十分に猟はできましたし、それ以上に、入ったら二度と帰れない森だと言われていたせいです。昔々に何人かの魔法使いが腕試しをしたのですが、沢山の魔法を一度にかけたため、魔法が歪んで森にかかってしまったのです。以来、空間がおかしなふうに繋がり、地図の作れない変な森となってしまったのです。

しかし魔法の使えるサヨシにとっては、その繋がりを避けて通ることができるため、まるで普通の森と同じでした。むしろ村の人間が間違っただけで入ってこないため、煩わしさが無い分とても居心地のいい秘密の場所となっていたのです。

ある日、サヨシは森の中で一匹の動物と出会いました。

今までに見たことも聞いたこともないような動物でした。さっそく家に連れて帰って両親に尋ねますが、彼らでもわかりません。

不思議な生き物でしたが、肩に乗るほどの大きさの上、愛嬌がある外見にサヨシはその動物を飼うことにします。サヨシはどこへいくにもその動物を連れて歩きました。

名前を知らないその動物は大変頭が良く、人間の話すことは全部理解しました。性質もおとなしく、肩に乗っていないときには背中の羽根でばたばたと空を飛んでサヨシに着いていきました。

それが聖獣の一種で世界に数えるほどしか存在しない『竜』という種別の生き物だとサヨシが知ったのは、皮肉なことに『竜』狩りにあつたときでした。

狩りに来た男たちは、村人たちからサヨシの飼っている不思議な動物の話をも偶然聞いたと言つて、サヨシの家に押しかけてきました。

最初は「珍しいものを見たいだけ」と言っていたのですが、サヨシが嫌々連れていくと、態度を豹変させました。竜を欲しがるお金持ちは大変多いので、サヨシの飼っている竜を寄越せと要求しだしたのです。

もちろんサヨシは断りました。

それは悲劇の幕開けでした。

男たちは竜を手放さない少年に業を煮やし、同席していた両親や家族に斬りかかったのです。とっさに父親が魔法で防御をしたものの間に合わず、幼い弟は無惨にも暴漢の剣にかかってしまいました。

「やめてくれよ！」

目の前で命を失っていく弟の姿に、サヨシはがむしゃらに男たちに向かっていきました。しかし相手になるはずもありません。その間にもほかの男たちが両親に標的を変えていきます。

「やめてくれってば！！」

腕の中から竜を奪われてしまっても、少年には両親の方が大切です。

しかし残忍な男たちは、目的の竜を捕まえてもサヨシたちから手を引こうとはしませんでした。

「顔を見られちまってるし、後から復讐されるのも困るんでな。悪く思うなよ」

結局彼らはサヨシが竜を渡しても渡さなくても、一家を皆殺しするつもりだったようです。

両親がサヨシに教えた魔法の中に、攻撃の呪文はありませんでした。

いえ、彼ら自身習得していなかったので、教えることができませんでした。平和なこの村に、必要のないものだったのです。

目の前で惨殺されていく家族の姿に、男たちに羽交い締めされながらサヨシはあらん限りの声で叫びました。

サヨシの家は、魔法の実験を行なうため、村の中でも外れの方に建っています。近くの家と言えば、二年前越して行ってしまったトーリ一家だけでした。いくらサヨシが大声を上げて、村人たちには届きません。

ついにサヨシにも剣が振り下ろされようという刹那、彼を救ったのは、一条の炎でした。

暴れに暴れて男たちの魔の手から逃れた小さな竜が、口から炎を吐いたのです。

声を出すことも忘れて、少年は男たちが其の黒の炭になっていく光景を、ただ呆然と違う世界のここのように見ていました。

「キュウ…」

生まれて初めて炎を吐いた竜の子供は、暴漢たちに制裁を与え尽くすと、犬のようにサヨシの手を嘗めました。驚くほどの冷たさに、竜が聖獣である証明を見た気がします。

母親の友人が、約束の時間になっても現れない母を訪ねてやってくるまで、サヨシは最後の家族を抱きしめて、ただただ涙を流していたのです。

「その友人と言うのがあたしだよ」

話疲れたのでしょうか。自分で出したお茶をおかわりしながら、リシンとツユキを連れてきてくれた女性は溜め息をつきました。

「その時の光景は今でも思い出したくないね。このあたしが腰抜かしたくらいだったんだから

。酷いなんてもんじゃなかった。

「サヨシはよく発狂しなかったもんだと思うよ」

驚愕の去った彼女はまずサヨシを自分の家に連れ帰り、それから村の若い衆を引き連れて事後の処理にとりかかりました。暴漢たちの遺体を埋葬し、友人とその家族の遺体を清め、葬儀の支度をしたのです。

葬儀の後、彼女はサヨシを養子として迎える気でいました。ほかに身寄りのない者同士です。村長も賛成してくれました。

けれども、すっかり表情というものを無くしたサヨシは首を縦には振りませんでした。

竜の子供を片時も離さなくなり、口数もめっきり減った彼は、一度に十の年を取ったようでもありました。

「僕とこいつがいて、いつまたこんなことがあるかわかりません」

ぽつぽつとつぶやく少年に彼女はあんたたちのせいじゃないよと説得するのですが、首は横に振られるばかりです。

「家族のことでは本当にお世話になりました。僕なら大丈夫です。こいつと二人で、森に住みますから」

サヨシが森に入れることは彼女も知っていました。確かに、あの森以上に安全な場所はないように思えました。

しかし。

「森から一生出ないつもりかい？」

それは人間として勧められた生き方ではありません。

「もう誰も傷つけないし、こいつに傷つけさせたくないんです」

生まれて初めて吐いた炎で人を殺きせてしまった竜の子を少年はそっと抱きしめました。竜の子はサヨシの心情を察したのでしょうか。小さく鳴くと、その頬を舐めました。

あの悲しそうな笑顔と言葉を、彼女は生涯絶対に忘れられないと思いました。

「以来、あたしも一度もあの子に逢ってないよ。元気にしてればいいんだけどね」

話が終わるとリシンは物も言わずに席を立ちました。派手な音をたてて椅子が後ろに倒れます。

「リシンっ?!」

ツユキはあわてて腕を引きますがその手すら払って、少年は、戸口に向かって走り出していました。

「だめだよそんなの。誰とも一生逢わないって...、そんなのだめだよ」

「リシンっ」

話を聞かせてくれた女性にそれでも一応お礼だけ告げて、ツユキは大柄な子供の後を追います。一人残された女性は、信じたことのない神様に、我知らず祈っていました。

あの二人に、森の扉が開かれることを。

「サヨシ君、僕だよっ、リシンだよっ」

勇んで森の中へ飛び込んでいったものの、二人は村人たちと同じようにただぐるぐると迷路を回るばかりで、中心らしきところにはまったく辿り着けません。

ツユキはいったん村へ戻ろうと提案したのですが、リシンは聞く耳を持たず、今度は言葉に頼る手段に出ました。

「サヨシくーんっ」

叫んでも叫んでも、応え（いらえ）はありません。

「ねえ、なんか声が聞こえるよ」

出してもらったお茶をすすりながら、ロウナはサヨシを見上げました。

背はロウナのほうが高いのですが、サヨシが窓際に立っているせいで、視線が上がってしまうのです。

「『リシン』って言ってるよ」

「聞こえないよっ」

サヨシは強く首を振ります。しかし、表情がその言葉を裏切っていました。普段柔和な彼が、明らかな動揺の色を浮かべていたからです。

そのことを指摘せず、ロウナはおっとりとした話しかけます。

「【理真】と同じ名前なんだね」

揶揄するでもなくいつもと同じ口調で、ただロウナは事実を告げます。サヨシは答えませんでした。

知性を湛えた穏やかな瞳を静かに伏せ、少し首を傾げる仕草をすると、ロウナはカップをソーサーに戻しました

先程から聞こえてくる声のほかに、もう一つ別の声が重なったように思えたからです。

その声の主を確かめるために、方法はひとつ。

ロウナは長くて細い手を、掌を上向けてサヨシに伸ばしました。

「水晶見せてよ」

「なんでっ」

肩に『理真』を乗せたまま、頑なな少年は、やっとロウナの言葉に振り返りました。

不思議そうに、ロウナは瞳を瞬かせます。

「いつもならなんにも言わずに見せてくれるのに、どうして？」

「今日は見せたくない気分なんだよ」

「でも俺は見たい」

「だからどうしてっ?!」

つい声を荒げてしまったサヨシですが、ロウナはにっこり笑って「見たいから」と告げるばかりです。

勝ち目がないことを悟り、渋々懐から水晶球を取り出し、ロウナの掌に乗せました。

しかし、片手の掌に丁度収まる大きさの水晶球には、室内の様子が反射するだけです。

「呪文は？」

何度聞いても覚えられないため、ロウナはすっかり自分で魔法を使うことを諦めていました。意地悪をしてやろうかと思わないでもありませんでしたが、サヨシは短く口の中で呪文を唱えると、人差し指で水晶を軽く叩きました。

途端に、水晶球の中に、森の様子が鮮明に映し出されます。

使い方だけは覚えたロウナは、今度はサヨシの力なしに、見たいものに水晶の焦点を合わせました。

必死にサヨシの名前を叫ぶ背の高い少年と、傍らでロウナの名前を呼ぶツユキの姿を認めて、この国のお姫様は嬉しそうに微笑みます。

「サヨシ、開けてあげてよ」

「ナっちゃん、俺が森を開けない理由は知ってるだろ?!」

「知ってるよ。だから言ってるのに」

「わかってないよ、全っ然わかってない！」

主の激しさに驚いた理真が、その肩を離れます。ロウナは空いた方の腕に理真を止まらせると、そのまま自分の肩に乗せました。ここ数日ですっかりロウナにも慣れた竜の子供です。

竜の子を撫でてやりながら、ロウナは柔らかな視線を水晶越しに垣間見える人物に向けました。

「わかってるよ。あっちの背の高い子がサヨシを迎えに来たりシンって子で、ツユキが俺を迎えに来たことくらい」

「ナっちゃんの迎え？」

訳がわからずにいるサヨシに、駄目押しのように天使の笑みを向けるロウナでありました。

「そうだよ。だから森を開けてあげて？」

もうそろそろ声も枯れようかという頃、ツユキはリシンの傍らに腰を落としました。彼にとっては、いるかいないか分からないロウナを呼び続けることの不安が募ってきているのです。むしろ話を聞く限り、人間との関わりを断ったサヨシがロウナと一緒に居るとは考えにくくなってきていました。

リシンはツユキの様子にも気付かず、ただひたすらに叫び続けています。

義理のないこの少年を放っておけないのは、愛しい人の安否を気遣う心がわかるからでしょう。

自嘲気味に笑うと、ツユキはもう一度自分も挑戦するために、尻の土を払って立ち上がりました。

「口…」

森の気配変わったことを察したのは、ツユキでした。

「まさか…」

眩いたのはリシンです。

周囲を覆っていた樹々の一部が音もなく自然に開け、緑の中から二つの人影が現れました。

「サヨシくん...」

「ナッちゃんっ」

どちらからともなく、リシンとツユキは走り始めていました。

しかしリシンの顔を見ると、サヨシはぱっと森の入り口に隠れてしまいます。

「サヨシくんっ?!」

一方、ツユキは、悲鳴とも歓声ともつかない声を上げて、こちらはい逃げないで待っていたロウナをしっかりと捕らえました。宙に吊り上げる形で抱き上げげ、紳士の彼にしては珍しく、相手の悲鳴を気遣ってあげる余裕も無くすほどです。

「ツユキっ、降ろしてよ」

抗議しながらも、顔に浮かぶのは決して嫌悪ではありません。

はしゃぐ二人に警告するように、竜の子が鋭く鳴きました。

「理真？」

相棒を見上げるサヨシに、人の子のリシンが不思議そうな顔して、自分を指しました。

「ぼく？」

「違うよっ」

威嚇するように理真が鳴くのは、それだけ危険が間近に迫っている証拠です。考えるよりも早く、サヨシは隠れていた場所から全員に向かって叫んでいました。

「みんなっ、中に入って！」

次に気が回ったのは、やはり騎士として気配に敏感なツユキでした。

とっさにロウナとリシンを抱えて、サヨシたちが出てきた入り口に突進します。

サヨシは理真も中に入ったことを確認して、森の中心に至る道を封じる呪文を唱えました。

待てと言う声は、厚い樹木の扉に掻き消されて聞こえませんでした。

「間一髪だったね」

緊張感があるのかないのか分からない声で、結果が全てとでも言うようにロウナが感想を述べました。

「ナッちゃん...」

咄嗟の動きで全員の安全を確保したツユキとサヨシが、ほとんど同時に疲れたような声を上げます。

当のロウナと言え、自分と一緒にツユキに庇われた少年を興味深げにしげしげと見ていました。

事態を一番理解していないリシンはロウナと視線が合うと、大きな瞳を更に広げました。綺麗な人だなあと言うのが、感想でした。

「リシン...って君だよ」

しっとりとして低く伝えられる声は、のんびりとしているけれど間延びしているわけでもなくて、耳にとっても心地よいものでした。

「そうだけど...、ええと、ロウナ姫、ですか？」

ツユキの様子を見ていれば自明の理と言うものですが、つい間抜けな問いかけをしてしまうリシンでした。

しかし、ロウナの「そうだよ」の返事より早く、サヨシの「えっ?!」の声が上がります。

三人よりは森の扉に近い位置で座り込んでいたサヨシは、。まじまじと友人を見つめてしまいました。

「ロウナ、姫...?」

「そう」

「姫ってことは、ひょっとしてこの国の王女様...?」

「そういうことになるかな」

「あの森の近くに住んでるって言わなかった?!」

「王城に繋がってるんだよ、あの森。だから嘘はついてないよ」

邪気のない口調は相変わらずで、サヨシは酸欠の金魚のように言葉もなく口をばくばくとさせたのでした。

ツユキは何となく事件の発端がロウナ自身にあるような予感を感じて、頭を押さえたのでした。

相変わらず事態の飲み込めていないリシンは、きょとんとしながらも、ロウナ姫に喰ってかかっていくサヨシの表情に陰りが無いことを読み取って、それだけで幸せを感じました。

サヨシ君、笑えるんだあ。

肩に回していた腕から微かな振動が伝わってきて、ツユキは不思議そうにリシンを覗き込みます。

リシンはまるっきり泣き笑いの状態で顔をくしゃくしゃにして、肩を震わせていました。

「リシン...?」

「キュ?」

理真が勘違いして、サヨシの隣から返事を返しました。サヨシとロウナも、じゃれあうのを中断して、理真の視線の先を振り返ります。そこには、大きな身体を小さく丸めてぼろぼろと涙をこぼす少年と、どう対処していいかわからずにおろおろしている青年の姿がありました。

「よかった...、よかった...」

嗚咽に、短い言葉が交じり、ツユキは助けを求めるようにロウナを見ました。背中を優しく叩いてあげる以外に、彼にできることはそれくらいしかなかったのです。

ロウナはサヨシの背中を、軽く押しました。

「行ってあげなよ」

「ナっちゃん?」

知り合ってからまだたった数日しか経っていないけれども、でも誰よりも自分を理解してくれる友人に、サヨシは戸惑いの色を隠せません。固まったまま動けないでいました。

「扉を開けたのは俺のためかもしれないよね。けど、ここまで付いてきたのはサヨシの意志だよ」

「あれは、さっきみたいなことがあるといけないと思って...」

「水晶球で見れば顔むことじゃない。魔法はどこからでも使えるんだから」

サヨシとロウナのただならぬ雰囲気、理真はどうするべきなのかとおろおろと二人を交互に見比べました。ロウナは理真を抱き寄せると、頭をそっと撫でました。理真はサヨシを心配しながらも、逆らおうとはしませんでした。

「俺がここにいる間、ずっと寂しそうな顔をしてたよね。口では誰でもいいから話があったって言ってたけど、嘘だった。」

ねえ、サヨシ。理真のこと呼ぶとき、自分がどういう表情してたか知ってる？」

「知らないよ、そんなのっ」

下を向いて唇を噛みます。今のサヨシには、ロウナの言葉は刃物のようでした。

「行っておいでよ。ずっと会いたかったんでしょ」

それでも囁かれた言葉は甘くて優しくて。

泣き続ける姿は自分の知っている子供の頃とはすっかり変わってしまったけれど、泣き方はまるで成長していない幼なじみに、サヨシはやっと一歩を踏み出しました。

憑かれたように、しっかりしない足取りで、それでもサヨシは歩き始めました。会いに来ると約束をしておきながら、一度も手紙すらくれなかった友人を抱きしめるために。

「リシン...」

暖かな拳が頬に触れた途端、涙は今までよりももっと勢いを増して、リシンの両目からこぼれ落ちていきました。

「すごくふあんだったんだ。サヨシくんのことしってるおばさんが、サヨシくんがさびしいかおしかできないひとになっちゃったって言ってたから、ぼくすごくふあんだったんだ。でも、サヨシくんわらってて。ほんとうによかった。ぼくサヨシくんのわらったかおすごくすきだから、にどとわらってくれなくなったらどうしようってそればっかかんがえて...っ」

昔は自分の腕の中にすっぽりと収まる子供だったリシンも、育ちすぎたために、サヨシは、今は頭を抱きしめることしかできませんでした。

「うん...。ナツちゃんに会うまではね、俺は自分のこと世界で一番不幸だって思った。」

でも、ナツちゃんは色んなことを教えてくれたんだよ。ナツちゃんの笑った顔、好きだよって言ったらね、『サヨシにもできるよ』って言ってくれたの。好きな人のこと考えたら、誰だって綺麗に笑えるよ』って教えてくれたんだ。だから俺、リシンのこと考えた...。会いたかったんだ。本当はずっとずっとリシンに会いたかったんだよ」

「サヨシくん...っ」

言いたいことも伝えたいこともたくさんあるのに、リシンにできたことといえばサヨシを抱きしめ返すことだけでした。二人は会えなかった時間の分までお互いを抱きしめあって、ポロポロと泣き続けたのでした。

サヨシがリシンに手を伸ばしたのと引き替えに、ツユキは弟のような少年から身体を離しました。リシンに必要なのはもう自分ではないからです。そして今自分が必要なのは、自分を必要としてくれるのは、サヨシを送り出した場所から少しも動かずに佇んでいる積年の想人でしょう。

先ほどの激しさとはかけ離れた優しさで、ツユキは理真ごとロウナをふわりと抱きしめました

。

「俺も会いたかったよ」

「うん」

理真に掌で目隠しをしておいて、ロウナは目蓋を閉じます。降ってきた口付けは、羽根のように軽く唇に触れた後、額とこめかみと頬と耳を経由して、もう一度唇に辿り着きました。ツユキはロウナの頬を両手で包むと、自分の方を向かせました。

「...身分が違うことくらい知ってる。でも俺はやっぱりナツちゃんが好きだよ。誰よりも早くナツちゃんに会えて、本当に良かった」

「誰が来ても扉を開けなきや意味はないんだけどね...。でも俺もツユキが一番に見つけてくれて嬉しかったよ。俺だって、ずっとツユキのこと、好きだったんだから」

再びツユキが強くロウナを抱きしめたことは言うまでもありません。

ほうほうの体で逃げ出した理真に、ロウナは小さなウインクを投げかけました。

「一件落着、だよな」

「は？」

小声の独言を聞きとがめたツユキが不思議そうな顔をしましたが、くすくすとロウナは忍び笑いを漏らすばかりでありました。

「じゃ、ナッチャン自分で付いてきたわけっ?！」

あの入り口から場所は移って、サヨシの隠れ家です。元々一人暮らしのため、四人分の調度はありません。四人は敷物を敷いて床に座っていました。

自己紹介から始まった会話は、事件の発端となったロウナとサヨシの出会いに遡っていました。

この森の道は歪んでいて、時折思いがけない場所に繋がっています。サヨシはその道を避けて通ることができますが、時折敢えてその道を歩いてみることもありました。一人と一匹しかいない生活は単調で、散歩は唯一の道楽だったのです。

ロウナと出会ったのも、その散歩の最中でした。

王城に繋がっている森とは知らず、そこに咲く珍しい花々に見とれていたサヨシは人の気配に気がつきませんでした。

「だれ？」

侍女の一人も付けず、庭のように勝手知ったる森を散策していたロウナは、見かけない少年に声をかけました。王様が聞いたら、誰彼構わず声をかけては危険だと言うでしょうが、ロウナには目の前の少年に警戒心を抱く必要がないことが、直感でわかっていました。

むしろ相手のほうがロウナを警戒している様子です。

「ここに来るの初めてなんだ？」

最初は王城に来た子供が迷って入ったのだと思ったロウナですが、自分の顔を見ても何も言わないところや身なりから、見当が外れたことを悟ります。

「あなたは？」

「この森のそばに住んでるの。ロウナって言うんだ」

邪気のないロウナの口調に、いつしかサヨシも当初抱いていた警戒心を解いていきました。儂げで優しい外見からは想像もつきませんが、王様や王妃様よりも外交が得意なのではと噂されているロウナ姫なのです。

西の村の外れにある森に籠もってから、動物以外と言葉を交わしたのは初めてです。

気がつけば夢中になってロウナと会話しているサヨシがいました。驚くほどに二人は気があって、面白いほどに話が弾むのです。

太陽はとっくに地平擦に沈みかけていました。どれだけの時間が経ったのか分からないほどの時間が経っていたようです。

「帰らなくちゃ」

これはロウナに向けられた言葉でした。ロウナがどんな種類の人間かはわかりませんが、少なくとも自分のように森に住んでいるようには見えません。着ているものも、彼が纏っている雰囲気も随分と上質のものです。

普通に考えたならば、こんな時間まで森にいれば誰かが心配することでしょう。名残惜しいけれど、引き留めることはサヨシにはできません。

もう一度会う約束をしたいけれど、サヨシはそれを口にするのをためらいました。今はほかに人はいませんが、いつどんな事態が起きるかわかりません。理真のためにも自分のためにも、ロウナとは二度と会わないほうが賢明です。

ここでロウナと話すことができただけでも、一生を森で暮らすことを決めた自分には贅沢で、そして危険なことだったのですから。

別れの言葉は、しかしサヨシの口から上ることはありませんでした。

「キュウ！」

「理真っ?!」

隠れ家で眠っていたはずの聖獣は、目が覚めたときにサヨシの姿が見当たらなかったため、彼を心配してここまで匂いを頼りに飛んできてしまったのです。いつもならば理真に行く先を告げて散歩に出るサヨシですが、眠っているところを起こすのは可愛そうだと親心を出したのが仇になってしまいました。サヨシが理真を大切だと思うように、理真もサヨシが大切なのです。

理真は一目散にサヨシに飛びつきましたが、蒼白になっている彼の様子から、ようやく自分が重大な失敗をしたことを知りました。あれだけ人間の前に姿を出すなとサヨシから言われていたのにも関わらず、自分から飛び込んできてしまったのです。

炎を吐くべきか悩む竜の子に、ロウナはありふれた動物に壊するように手を伸ばしました。

「理真って言うの？この子」

「...そう。友達なんだ」

友達を強調して言うサヨシに気づいたのかどうか。サヨシに向けたのと同じ笑顔でロウナは理真に微笑みかけました。

「別に俺は何もしないから、炎は吐かなくてもいいよ」

「！」

「竜の子でしょ、理真って。見たことあるよ、知ってる」

「ナっちゃん...」

正確に正体を言い当てた即席の友人に、サヨシは顔が強ばっていくのを感じました。また悲劇が繰り返えられるのではないかと言う恐怖が、サヨシの胸いっぱい広がります。

「信用ない？」

サヨシの様子に、困ったようにロウナは眉を下げました。

理真はサヨシとロウナの顔を交互に見つめていましたが、伸ばされた腕に、三本指がついた前脚を軽く乗せてみました。ロウナは首を傾げるだけです。

上目使いに相手を見ていた理真ですが、そこに悪意が何も存在しないことを読み取ると、サヨシの方に戻っていきました。

「どうやら認めてもらえたみたい？」

サヨシと理真の様子を見ていたロウナは、理解はできないけれど会話の内容を察して問いかけてみました。聖獣は人間の正邪を読み取ることができると言われていたのです。

「...うん」

「よかった。せっかく知り合えたのに、これっきりじゃ寂しいもの」

「でももう来ないよ」

無邪気に喜ぶロウナに、森に籠もり出した頃のような冷静な瞳のサヨシが応じました。

「どうして？」

「ナッチャンは大丈夫でも、いつどんな人と会うか分からないからね。やっぱり出歩かないほうがいいんだよ、僕達は。

...ナッチャンも早く家に帰ったほうがいいよ。ひょっとして僕らを見つけた人がいたら、ナッチャンも狙われるかもしれないから」

「じゃあ、守ってよ」

当然のように言われた言葉が、一瞬理解できませんでした。

「言ってる意味わかってるの?!」

「だってサヨシたちは出歩かないで安全なところに帰っていくんでしょう？だったら俺もほとぼりが覚めるまでそこに連れてってよ」

話術において、サヨシが百戦錬磨のロウナに適うはずもありません。結局説得(?)されて、サヨシはロウナを連れて西の森に戻っていったのでした。

話の腰を折る方になることも構わずに、ツユキはロウナに詰め寄りました。

「どういうつもり!?あの森は王様がナッチャンにくださったものだから、危険なんて何もないはずだよ!」

「でも警備の人とかいるもの。俺に危害を与えなくても、ひょっとしたらサヨシや理真には悪さしたかもしれない」

ツユキはロウナの読みの深さに絶句しました。確かに警備の兵士や侍女たちにとっては正体の分からない少年や獣は、危険分子と見なされても仕方がない要素があるのです。

「...じゃあ、守られたのはひょっとして僕たちの方？」

ロウナがいれば兵士たちも不用意には攻撃を仕掛けてこないはずです。この国において、これほど強力な護符はないでしょう。

微笑むだけでロウナは明確な返答は避けました。

ががが音をたてる頭痛に顔をしかめるツユキに、リシンは同情の視線を送りました。

「じゃあせめてあの置き文の文章、なんとかならなかったの？」

「え、あの文章だからヤタクが俺を探させたんでしょ？」

サヨシたちについていくと決めたものの、いざ帰ろうと思っても帰ることができるかどうか分かりません。自力で帰れないとなると、あとは迎えにきてもらうしか方法はないでしょう。そこであの置き文を思いついたのです。サヨシにとっては、ロウナの家族を心配させないように書いたつもりの文章でも、王城の人間にはロウナの誘拐通牒となる、一石二鳥の内容でした。

「ヤタクのことだから、無節操に摸索命令だしたんじゃないの？」

「そこまでわかっててああいうことやるあたり、ナツちゃんだよな...」

半狂乱になっている王様のことを考えて、ツユキは今度は胃を押さえました。しかしロウナの方はあっけらかんとしたもので、涼しく次ぎのように答えてくれました。

「大丈夫だよ。俺がいないならいないで、マヒロがなんとかしてくれてるよ。案外そっちのほうがヤタクには幸せかもしれないし」

反論する言葉が見つからず、ツユキはがっくりと肩を落としました。

王様の王妃様への熱愛ぶりは結婚前から有名で、ついでに付け加えるならば現在も進行中だということを、嫌と言うほど知っていたからです。いつもは王様に厳しい王妃様ですが、掌中の珠のロウナ姫不在で気を落としているだろう王様になら、多少は優しく接されているかもしれません。王様も、辛い二律背反のことでしょう。

ツユキの苦悩を余所に、立てた膝の上で頬杖を組んだロウナ姫はぼつんと呟きました。

「サヨシ。ところで、さっき扉のところに来てた人たちって、どんな人たちだったの？」

「どくなって...」

「水晶で見たんでしょ」

「...すっかり忘れてた」

リシンとの再会やらツユキに事情を説明するやらに大忙しで、ここに飛び込む原因となった敵のことどころではなかったのです。これには、サヨシが魔法で作っている扉を閉じてしまえば、相手が入って来られないという自信も一枚噛んでいることは確かでした。

立てた膝に肘を付き、両手に顎を乗せた姿勢で、上目使いにロウナはサヨシに【頼み事】をします。これに逆らえる人は、おそらく王妃様くらいでしょう。あの人には物事の本質を見抜くところがあって、見かけに騙されてくれないのです。

実際、サヨシもロウナのこの仕草には大変弱く、すでに何度か【頼み事】を聞いてしまった実績がありました。

このときも例外ではありません。

「じゃあ。サヨシ、さっきの人たちが何の目的でこの森に入ってきたのか調べてよ」

「わかったよ」

先ほどはリシンたちの姿を映し出していた水晶を、再び懐の中から出すと、同じように呪文を唱え、森への侵入者の追跡を開始しました。

リシンとツユキは遠くを見る魔法が物珍しく、どちらも水晶を食い入るように見ていたのです。

ロウナは二人とは違った意味で、水晶へ熱い眼差しを注いでいました。

「見つけた」

呟きと共に、緑ばかりが映し出されていた映像が、扉からさほど離れていない位置でなんとか森の中へ入ろうとしている三人の男たちの姿に変わりました。

「ツユキはどう思う？あの人たちって俺を捜しに来たのか、それとも理真を狙ってきたのか」

「理真のほうだろうね。お城で一回も見たことないし、それにナツちゃんを捜しに来たにしては、ナツちゃんのこと呼んでるような感じが全然しないもん」

『りしん』と呼ばれる度に反応をする一人と一匹ですが、一人の方は【紛らわしい】と怒るところか嬉しそうに【理真】の名前に耳を傾けていました。大好きなサヨシが、大切な友達につけた名前が自分のものだと言うことが少年には嬉しくて仕方がないのです。サヨシはほかに思いつかなかったただだと弁解していましたが、その時のリンゴ色の頬を見ていれば、本音がわかったというものです。

「でもどこからこの森に竜がいるってことがわかつちゃうんだろう？」

同じ名前のおよしみからか、初対面で打ち解けた一人と一匹は、今も理真がリシンの肩に停まっています。

「どうしてかな。わからないよ」

本当は村の人間が、悪意のあるなしにかかわらず余所の人間に漏らしたのだろうと予想はついていましたが、ロウナはこれ以上サヨシを傷つける気はありませんでした。彼がこの森に閉じ込められることになった惨劇の引き金も、おそらくは村人が原因だったのだろうと考えていたからです。特産物も何もない村では旅人が来ることは希です。むしろ村の者がもっと大きな村や街へ出て行って商売をすることが多く、その時の話の種に、物珍しい動物のことが出たとしてもおかしくはありません。密猟者たちはそこで仕入れた情報を頼りに、理真を探し当てたのでしょう。いくらサヨシの知り合いの女性が口止めをしたとしても、一度流出した噂は消せるものではありません。

「ただ言えることは、ここに本当に竜の子がいると知った以上、彼らが絶対に後に退かないということだろうね」

「大丈夫だよ。あの扉の守りは鉄壁だもん。どんなにがんばったって、あの人たちがここに来ることはないよ」

「本当にそう言い切れる？」

自信満々の魔法使いに、嫌味ではなく純粋にロウナは問いかけました。

「ナツちゃん？」

「相手がもし、サヨシよりもっと強い魔法使いを連れてきたとしても、そう言い切れる？」

今までは腕力を頼りにした無頼著しか知りませんでした。でも確かにロウナ姫の言うように、魔法での勝負も現実にはありえるのです。サヨシは目に見えて真っ青になりました。一度もそういう事態を考えたことがなかったのです。両親はサヨシの魔法の力は大きいとよく誉めてくれましたが、彼ら以外の魔法使いを知らないサヨシは、いったい自分がどの程度のレベルの持ち主なのか皆目見当がつきません。ひょっとしたら、世間一般ではまったく通用しない程度なのかも知れないのです。

盲点を突かれて言葉を失ったサヨシを、リシンは大きな手で抱き寄せました。

「平気だよ。もし何かあっても僕がサヨシ君を守るよ」

「ばーか」

子供らしい言い草に、ツユキが真剣に呆れた声でリシンの額を小突きました。

「それじゃ、サヨシが辛くなるだけだろ。またこいつを一人にするつもりか？」

具体的に口には出しませんでしたが、暗に両親のことをほのめかしていることはさすがにリシンにも伝わってきました。親切にしてくれたあの女性と暮らすことすら、相手を惨劇に巻き込むこ

とを恐れて辞退したサヨシです。

「ごめんなさい...」

「いいよ、リシンが悪いわけじゃない」

身体だけは大きくなった子供の頭を、サヨシは愛しそうに撫でるのでした。

どんなことにも素直な態度と感情を見せるリシン少年と居ると、頑なだったサヨシの表情も、時が経つにつれてどんどん優しくなっています。ロウナは友人のそんな姿を見るにつけ、嬉しくて仕方がありませんでした。

そして、二人にはもっともっと笑っていてほしいので、こんな提案をしてみます。

「ね、サヨシ。実は俺に名案があるんだけどさ」

「どんな？」

「サヨシと理真が安全で、リシンとサヨシが離れなくて良くて、俺とツユキが正々堂々と王城へ戻れる方法だよ」

自信溢れるその声に逆らえる人はこの場に居ませんでした。

お城の衛兵から『ロウナ姫帰還』の報告を受けると、王様は王妃様と顔を見合わせて、それから満面に笑みを浮かべられました。

「宴会の準備をしろ！」

近くの侍女たちに申し付けると、大急ぎで姫の待つ大広間へ走り出してしまいます。

王妃様はその後ろ姿を「仕方ない」と肩を竦めて見送ると、王様では気の回らない湯浴みの準備や細々とした支度を頼んで、ご自分も広間へと走っていかれるのでした。王様ほど表面には出ないものの、王妃様にとっても大切な姫なのです。

広間には、がっしりとロウナ姫を抱きしめている王様と、対処に困っている姫の幼馴染兼近衛騎士のツユキと、見たことが無い顔の少年二人が立ち尽くしているところでした。

「こほん」

わざとらしく王妃様が咳払いをひとつすると、王様ははっとしてロウナ姫から身体を離しました。

花の蕾が綻ぶような笑みで、王女様は、王様の肩越しに王妃様の名前を呼ばれました。

「マヒロ」

「お帰り、ロウナ。無事でなによりだよ。」

それから、ツユキ。ロウナを連れ戻してくれてありがとう」

姫第一の王様のこと、労う言葉の一つもかけていないだろうという予想は当たっていたようです。慌てたように、王様から感謝の言葉が述べられました。ロウナ姫が関わらなければ、賢王として有名な方なのです。

「ツユキ、本当にありがとう」

「いえ、王様。姫を助け出すには彼等の力添えがあったからなのです。私一人では、到底成し遂げることが出来ませんでした」

サヨシとリシンは、初めて会う王様と王妃様を前にしてがちがちに緊張していました。打ち合わせ通りとはいえ、ツユキの口から自分たちの事が語られると、今にも顔から噴出しそうな気になってしまいます。

「力添え？」

「はい。姫は、姫を狙う西の森の悪党共に連れ出されたのですが、その時姫を王城から連れ去ったのは彼でした。しかし、彼はその悪党たちに脅されて従っていただけなのです。私が行くと、姫を助ける手助けをしてくれました」

『姫を連れ去った』で剣の柄に手が伸びた王様ですが、立て板に水のごとく話すツユキの言葉の内容に、じきに納得して構えを解かれました。ロウナもツユキもこの場面を一番心配してただけに、王様の手が剣から離れると内心胸を撫で下ろしました。

「そうなんだよ。捕まえられている間も、彼だけが親切だったんだ。彼が居たから、俺は無

事だったんだよ」

サヨシがロウナにとって恩人であることを強調すめため、本人も横から言葉を差し挟みます。

捕らえられている間のことを思い出して微かに震えるという、ロウナ姫迫真の演技に、王様はまんまと乗せられてしまいます。

「そうか。...その方、名前をなんと言う？」

「サヨシと申します、王様」

「サヨシ、ありがとう」

面と向かってお礼を述べられると、疚しい心があるだけにサヨシは恐縮して俯いてしまいました。王様は自分と話すとき大抵の人がそういった態度をとるので、サヨシのことをあまり不思議には思われなかったようです。

それよりも、最後に残った背の高い少年に、次ぎの興味が向けられました。

「この子は？」

「私が姫を探して旅をしているときに、手伝いをしてくれた少年で、リシンと言います。実はサヨシとは幼なじみで、彼は彼でサヨシを更生させるために旅をしているところだったのです」
リシンについては、あながち作り話ではないため、嘘が苦手なツユキも安心して王様に答えることができました。

「リシンか。よくツユキを助けて、ロウナを救ってくれた。ありがとう」

「そんな、王様...」

こちらも大きな身体を小さくして、王様の握手に答えるのでした。

一通りの事情を説明し終わると、ロウナはそれまで抱えていた大きな袋を持ち直して、王様と王妃様に天使のような微笑みを向けました。実はここからが本番なのです。ツユキたちははらはらと自分を見ているようですが、当の本人は失敗することなどまったく考えていませんでした。

ロウナの抱えている袋に、目敏く気がついたのは王妃様でした。

「ずいぶん大きな包みなんだな」

「実はヤタクとマヒロにお願いがあるんだけど」

「その袋に関係のあることか？」

「そう」

もう一度、にっこり邪気のない笑みを浮かべると、ロウナ姫は麻袋の口を広げました。

初めに出てきたのは、翼。ついで三本の指。そして頭。...中から出てきたのは、世にも珍しい動物でした。

「竜の子じゃないか！」

飼った経験はなくても、無類の動物好きの王様は、一目で理真の正体を見抜きました。このあたりは親子かもしれないと、ロウナとの出会いを思い出してサヨシは誰にも気づかれないように小さく苦笑をこぼしました。

触りたくて仕方がない様子に、さりげなくロウナ姫は理真を王様から庇います。王様は動物にはとても優しい方ですが、サヨシの許可がないことと、理真が初対面で懐くかどうか分からなかったからです。

「そんな珍しいものをどうしたんだ？」

「本当はサヨシのものなんだけどさ、俺にも懐いてくれてて、どうしても城で飼いたいんだよ。ダメかな」

「飼うのは構わないが、その少年のものなんだろう。俺は人のものを無理に奪うような子に育てた覚えはない」

人としての道理・義理には厳しい王様です。時には頑固なところもありますが、ロウナもそして王妃様も、王様のそういう真っ直ぐな性格が大好きでした。

「やだな、話は最後まで聞いてよ、ヤタク。誰もサヨシから理真を離すなんて言ってないじゃない。そうじゃなくて、サヨシも一緒にここで暮らしてもらって、それで理真を飼いたいんだよ。懐いてるって言ったところで、サヨシとの絆には全然適わないしね」

「そういうことなら...」

口元に手を持っていくのは王様の癖です。考え込む姿は、もう少しで落ちると確信して、ロウナは最後の一手を押しました。

「サヨシは、魔法の素質がすごくあるから、できれば国立の魔法使いの学校で勉強させてあげたいんだ。それにね、俺を獲った悪党たちにご両親が殺されてるから、身寄りがないんだよ」人情話に弱いのは、王様だけではありません。王妃様は、サヨシの心中を図って無言で少年を抱きしめました。

「早速誰かに部屋を整えさせるよ。ロウナの部屋の近くのほうがいいだろ？」

「理真の部屋も作ってあげてよ」

「二間続きの使っていない部屋があるから、そこにしよう」

王様が口を挟む前に、全ては決定していました。王妃様と王女様は実に嬉々として、新しい住人と住獣の部屋の内装や調度について盛り上がり始めてしまったのです。サヨシは二人の間で恐縮するばかりです。

ああなってしまうえば誰も二人を止められません。ツユキは同じような心境の王様と視線が合っ
てしまい、どちらからともなく、苦笑いを浮かべていました。

サヨシのことを心配して気が気でない様子のリシンの肩を叩き、ツユキは小さく首を横へ振る仕草を示します。

言葉にしたのは王様でした。

「あの二人に適うものはないよ。可哀想だけど、サヨシは当分開放してもらえそうにないな」

「そんなぁ」

「まあ、まあ。今度は全然会えなくなるわけじゃないから、いいじゃないか」

気落ちするリシンの首に腕を回し、慰めの言葉をかけてみます。しかし、リシンは恨めしそうな視線を投げかけてきました。

「でも僕だってそんなにしょっちゅう王都まで来られるわけじゃないんだよ。この旅だって、お父さんには内緒にしてたからさぁ」

「そうだったのか?!」

「そうだよ。だからツユキにくっついてったんじゃないか。一人じゃどうやって旅していいか分からなかったんだから」

言ってしまうってから、リシンは口を塞ぎました。ツユキがいつものように接してくるので、王様

の前だということをすっかり忘れてしまっていたのです。仮にも貴族であるツユキを、馴れ馴れしく呼び捨てにしてしまっていました。

でも、王様は貫大な方でした。

「ああ、そんなことはこだわらなくてもいいよ。むしろ俺としては歓迎したいね」

「あ、ありがとうございます...」

なんと答えてよいのかわからず、一応無難な言葉を選ぶリシンでした。

その様子がおかしかったのでしょうか、王様はツユキに向かって大声で笑いました。

「ツユキ、この子は面白い子だな。おまえはいい子を友人に選んだよ」

ツユキとリシンはばちくりと目を合わせ、それからツユキは満面の笑顔を浮かべました。端正な造りの顔のツユキが笑うと、ロウナとは違った魅力で見る人を幸せにします。つつられて、見ている人まで笑顔になるほどの、それは威力がありました。

「何話してるの？」

王様の笑い声に、興の乗っていた話を中断されたロウナ姫ですが、ツユキの全開の笑顔に不機嫌を帳消しにします。会話に加わろうと、サヨシを間に挟んだまま王妃様と三人でこちらへ寄ってきました。

数日ぶりでご機嫌な様子の王様は、王妃様の腕をとり自分の方へ招き寄せると、額にそっと接吻をなさいました。人前での恥ずかしい行為に即座に王様を殴り飛ばそうと拳を固める王妃様ですが、今日までは特別扱いにしてやるかと、殴りかかることを中止されました。辛そうな王様の表情をこのところ見続けてきたせいもあるでしょう。

「大したことじゃないよ。ツユキはいい友人を持ったと誉めていたところだ」

「王様っっ」

手放しで誉めてくださる王様の言葉だけでも対応に困るのに、儂げで可憐な印象を与えておきながら実は芯の強いロウナ姫は、更なる爆弾を投じてくださいました。

「そうだよ。いい友人なのは認めるけど、仲が良すぎて俺は妬けるな。リシン、ツユキ奪ったらだめだよ。俺の方が先に惚れたんだからね」

「ナ、ナっちゃんっ?!」

悲鳴を上げたのはツユキでした。

「ロウナッ?!」

目を白黒させて尊いだのは王様です。

王妃様はこれからの騒ぎを予想して、額を押さえました。サヨシとリシンと理真は何をどうしたら良いのかわからず、ただひたすらお互いの手を握りあっていました。

王様の怒りのボルテージが上がっていくのを見るにつけ、ツユキの顔から血の気が消えていきます。

ナっちゃんっ、なんてこと言ってくれるんだよっっっ。

内心で叫んでみても、王様の前では口が裂けても声には出せません。

「ロウナ、今の意味は一体どういうことだっ?!」

怒り心頭のヤタク王は、ツユキには見向きもせず、ロウナ姫に喰ってかかりました。しかし、相

手は涼しい顔です。

「そのままの意味だよ。それにさ、定石でしょ」

「何がっ」

「捕らわれたお姫様が、助けに来てくれた勇者と結婚するのは」

「助けに来たのがツユキじゃなかったらどうするんだ?!」

「なんだ、そんなの。簡単だよ」

ツユキの腕に自分の腕を絡め、ついでに白皙の頬を肩に乗せました。

—凶悪なほど甘く蕩けるような微笑みを添えて。

「ツユキが来るまで帰らないだけだから」

理真すら同情の視線をツユキに向けたのであります。

こっそりとツユキが王様の説教を受けている頃。

騒動の元凶となったロウナ姫はにこやかに、サヨシとリシンと理真と、姫の自室で寛いでいました。夜には王様が宴会を開くので、全員湯浴みと着替えを済ましての集合です。

とっておきの紅茶の葉で煎れたお茶を片手に、満足そうな表情をこぼすロウナ姫に、サヨシはため息を落としました。

「サヨシ？」

「ナツちゃんてさ、実はすっごい策士じゃない？」

西の森からこの王城へ入ってからのことまで、計画を立てたのは何を隠そうこのロウナ姫なのです。

理真とサヨシを王城で暮らせばいいよと言い出したときには、本当はどうなるものかと思っていたのです。

『なんだよ、それ。そんなことしたら、危険じゃないっ』

『隠すから、見つけようとする人がいるんだよ。だから逆に、大々的に存在を知らしめてしまえば、返って安全になるはずじゃないかな。大体竜の子を捕まえようとするのは、お金持ちに売って商売するためでしょ。すでに王城で飼われているのを盗む人はいないと思うよ。それに警備は重厚だしね、一応は』

名目上、姫のペットとしておけば、城の兵士が理真を傷つけることはないし、また万が一、賊が侵入したとしても、彼らが理真を守ってくれるでしょう。

結局サヨシは説得され、先程王様たちに向かって演じた内容の芝居が組まれたのです。これは本当によく出来た内容で、サヨシの置き文についても、ツユキたちにサヨシとリシンが同行していることも、ロウナ姫が攫われたことについても、全て一応の説明がつくのです。

西の森からの脱出方法も、ロウナ姫の案でした。ツヨシが知っている中で、一番王城に近い森へ繋がっている、森の不思議な道を使用したのです。これは王城の森へ直接来てしまっは、組

んだ芝居の説明がつかなくなるため、あくまで旅をしてきたと見せかけるための配慮でした。ただし、一つだけ難点がありました。

西の森に居る敵を巻くことは出来るのですが、ついた先の森で誰かと鉢合わせをした場合には、自分たちで血路を開くしかないという点です。剣の手練のツユキが居るとはいえ、彼も無敵ではありません。念のため理真には袋の中に入れて姿を隠してもらい、一行は慎重に馬で半日の距離を移動したのです。幸い、誰に見咎められることもなく、一行は無事に王城の門をくぐる事が出来ました。

「よくあそこまで周到に考えたよね」

「誉めてくれるの？ありがとう」

「思うんだけどさ、あれって本当にあの時考えたの？」

侍女が用意してくれたお茶うけの焼き菓子を摘みながら、広間では聞けなかったことを尋ねてみます。言葉は問いかけですが、半分以上確信が含まれていました。絶対にあれは前々から用意してあった、と。

果たして。ロウナ姫はにやにやと意外と下世話な表情で（しかし、はしたなく見えないところが育ちでしょうか）サヨシの質問に答えをくれました。

がっくりと頭を落とし、「やっぱり」と思ってしまいます。

「いつ位に？」

「考えた時期？」

「そう」

「サヨシに初めて会ったときだよ」

「えっ?!」

「じゃないと説明つかないと思わない？あの置き文」

「え、えええーっ?!」

「とっさったんだよね。サヨシと理真を見てたら、図々しくも、この子たちを幸せにしてあげたいと思ってしまって」

全てを拒絶して生きていこうとする少年の姿は、あまりにも痛々し過ぎました。出来ることならばあんな寂しげな笑顔ではなく、太陽のように笑ってほしかったのです。サヨシが短い時間でも、ロウナを大切な友人と感じたのと同じように、ロウナにとってもサヨシは、本音で話ができる数少ない親友の地位を、あの時間の中で確立してしまっていたのです。

「けど、サヨシの意志を無視して無理強いするつもりはなかったんだよ。もしどうしても外の世界へ出ることが嫌なら、ツユキが来ても俺は一人で帰るつもりだったから」

「その割りには熱心に口鋭いてくれたよね」

「無理強いじゃないってわかってたからだよ。リシンと会ってからのサヨシって、見てるこっちが照れたくなるくらい、穏やかで優しい顔してたからね。『リシンと一緒に居ることが出来るんだよ』って誘ったら、落ちないはずがないって確信できるくらいだったもの」

「そっ、そんなことないよっっ」

真っ赤になった顔での否定は肯定以外の何ものでもありません。リシンはロウナの指摘にぱっと表情を輝かせました。

「本当っ？」

「リシンが居なかったら、きっとずっとあそこに居続けたよね、サヨシは。だからツユキが君を連れてきたときには、俺、ツユキには負けたと思ったよ。何だよ、それって...て。俺がどんな言葉を尽くすよりも、ずっと効果があるじゃないかって。—ずるいよね。いつだってツユキは俺のしてほしいことを叶えてくれるんだ」

背中から自分を抱きしめてくる大きな子供を、本気ではなくひき剥がそうとしながら、サヨシはロウナの言葉に含まれた響きに首を傾げます。

「自分でのろけてるってわかってる？ ナツちゃん」

「知ってる」

即答に、サヨシは胸の前で両手を合わせました。

「...ごちそうさま」

サヨシはそう言うてはみましたが、本心ではありません。人間、自分が幸せなときには誰に対しても寛容になれるものなのです。しかもそれが大切な親友の上に、自分に幸せを運んでくれた相手ともなれば、なおさらです。

しかし、ロウナはツユキのことで、サヨシたちに隠していることがありました。

サヨシと理真についていくと決めたとき、ツユキが捜しに来てくれることも打算の上だったのです。

身分違いを気にして好きだと言ってくれないツユキにも、箱入りのまま誰との交際も認めようとしない王様にも、いい加減決着をつけたかったのです。そのためには自分が誰かに【攫われる】のは好都合の状況でした。実は、あの大広間での「勇者と結婚する」と言う煉弾発言は、王様へツユキとの交際を認めさせるために、あらかじめ用意していたものなのです。

ほかにも、ずる賢い策士は、はっきりしないツユキに、自分から想いを打ち明ける心づもりがありました。けれど、ツユキは最後の最後にロウナの欲しいものを、正確にくれるのです。

「好きだよ」

西の森で再会した時、抱きしめられたまま囁かれ、つくづくツユキには適わないと、ロウナは思い知らされました。

反面、王様のことは、ツユキに相談せずのことだったので申し訳ないという気がしないでもないので、この機会を逃しては次がないという恐怖観念から、あえなく実行してしまったのです。

自分から進んで言ってくれる人なら、俺がこんな狂言を打つ必要はなかったんだけどね。

好きなら好きと態度と言葉で表わしてくれるサヨシの恋人を見ながら、少しだけ羨ましいと思ってしまう、ロウナ姫なのです。

その夜、ロウナ姫の無事な生還を祝う宴が、盛大に王城で催されました。

仏頂面の王様と、呆れ顔の王妃様の横には、いつもより椅子が一つ多く設えてありました。

初めてその席—王族専用のその席に座らされたツユキは、緊張で端正な顔が強ばっていましたが、傍らのロウナ姫は普段にも増して優しく、そして幸せそうに微笑んでいらっしゃいました。

ロウナ姫を救い出した勇者であり、幼なじみであり騎士であり貴族である青年は、今夜初めて『ロウナ姫の婚約者』として紹介されたのです。

ロウナは知りませんでした、長々とした説教の中で、珍しくもツユキが『ロウナを欲しい』という意志を明確にしたのです。

王様も、臣下として可愛がってきた臣下なだけに、強硬に反対が出来なくなってしまい、最終的には王妃様の『結婚したからって、ロウナが俺たちの娘じゃなくなるわけでもないし』の一言で、決着がついてしまったのです。

同じく、勇者・ツユキに協力して姫を助けた功労者としてリシンと理真とサヨシも紹介されたわけではありますが、その時壇の下から、「あっ」と言う場違いな声が上がりました。

声の主が、ロウナ姫を探す旅の途中で会ったどこかの国の王子だと気付いたツユキとリシンは、二人にしか分からないような忍び笑いを交わしたのでした。相手はしきりに地団太を踏んだようですが、二人の知ったことではありません。

ロウナとサヨシはそんな二人を不思議そうに見ていましたが、それぞれに優しく微笑まれると、こちらにもっこり笑ってしまうのでした。

王様はそれが不機嫌の元のようなのですが、王妃様の仕方なさそうな声もたらした言葉に、こちらにも幸せそうな表情を取り戻したのでありました。

「...だったら、こっちも昔に戻ればいいだろ」

接吻は、王妃様の久々の痛烈なパンチが炸裂して、残念ながら阻まれたようではありましたが。

かくして、王女様探しの大騒ぎは、幸せそうな三組の大団円をもって、集結を迎えたのでありました。

めでたし、めでたし。

十 第四章 終 十